
ブタの兄弟

遥胡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブタの兄弟

【Nコード】

N0217D

【作者名】

遥胡

【あらすじ】

3匹の仔豚が自分達の身を守ろうと頑張ります！仔豚たちは、何から、どうやって自分の身を守るのか！？最後に笑うのは誰か！？『赤美ちゃん』の番外編です。

ブタ1

ある森の奥深くに、3匹の仔豚がいました。仔豚たちは、輪になって話し合いをしていました。

「どうしよう。ブタ一兄さんいちにい。このままだと僕たち食べられちゃうよ。」

「ブタ二兄さんににいは、この中で一番小さいからまだいいじゃないか。ボクなんか一番太ってるから絶対先に食べられちゃうよ!」

「落ち着け、ブタ三さん。何とか逃げ延びる方法を考えるんだ。」

3匹は考えました。

『ブーブー』鳴きながら考えました。

ひたすら考え続けました。

『ブーブー』が『フーフー』になるまで考え続けました。

『フーフー』が『フイフイ』になりかけたとき・・・

「そうだ!」

ブタ一いちが急に立ち上がりました。ブタ二にとブタ三さんは目をまん丸にしました。

「ど、どうしたの?」

「何か思いついたの?」

ブタ一は、二匹の質問に満面の笑みを浮かべて答えました。

「アイツに捕まえられないように、僕たちの家を作ってそこに非難すればいいんだよ!」

「そうか!それは、名案だね。じゃあ、早速材料を集めよう!」

「そうだね。じゃあ、3匹それぞれの家を作ろうよ!そしたら、1匹の家がダメになっても残りの2匹の所にいけばいいもん!」

3匹は、そうと決まれば是は急げと、自分の家を作るための材料集めに行きました。

しばらくして、3匹は集めてきた材料を使って、カンガン カンコン カシユカシユ ワサツ と、自分の家を作っていました。

「……できた〜!!!」

3匹は、それぞれの家を見ようと集まりました。まずは、ブタ三の家です。

「ボクは藁わらの家を作ったんだ とても涼しくて快適だよ」

「へえ〜、これはいいね。」

「ブタ三にはいい物作っただんじやない？」

「ブタ二兄さんは、ボクを侮あなごりすぎだよ！」

ブタ三は、ブヒブヒ怒りながら言いました。

「ここら、喧嘩は駄目だよ。じゃあ、次はブタ二の家を見せておくれ。」

「おう！僕の家は木を使って建てたんだ！家といえば木！木材の香りに包まれて午後のひと時を過ごすのさ」

ブタ二は、目をキラキラさせて自分が作った家に案内しました。

「へえ〜、これはいいね。」

「……ブタ一兄さん。それ、さっきも言ったよ。」

「何を言っただいブタ三。一回目の「へえ」はドの音から始まったけど、二回目の「へえ」はレの音から始まったんだよ！」

ブタ一は誇らしげに言いましたが、ブタ二とブタ三は、

() (ほとんど変わんねえじゃねえか!!) ()

と、思いました。

でも、そこは兄想いの優しい弟達。そんな事、口が裂けても言いません。

「じゃ、じゃあ、次はブター兄さんの家を見せてよ！」

「ブター兄さんは、どんな家を建てたの？」

「僕？僕のは凄いや。今回は頑張ったんだよ。まあ、見てよ！」

ブタ二とブタ三は、その言葉を聞いてワクワクしながら兄の家を指しました。

さて、弟達が見た家とは・・・！？？

ブタ2

周りの木々が青々と色鮮やかになってきたこの時期、その中に一際大きい木がありました。

それを見上げていた、ブタ二とブタ三は時間が止まってしまったかのように、ピクリとも動きません。

その傍らには、ブターがニコニコしながら立っていました。

その、一際大きい木の上にはレンガ造りの家が建っていました。

「どうだ！ 凄いだろう？ 木の上ならアイツもなかなか来れないだろう！」

ブターは腰に手を当てて えっへん！ という感じです。

(なんか・・・今にも落ちてきそうなかんじんだけど・・・)

(木の上にレンガは、無理があると思うんだけど・・・)

でも、そこはやっぱり優しい弟達。兄の顔を見て・・・

「確かに、これは凄いね！ ブター兄さん。」

「こんな事、誰も思いつかないよ！」

と、微笑みながら言いました。

「そうだろ？ それに、お前達の家もあるんだ。アイツが来ても絶対大丈夫だよ！」

「僕の予想では、3日後がアイツの誕生日らしいから、その日に来ると思う。」

ブタ二は、深刻な顔つきで言いました。

「で、でも大丈夫だよ！ 家の中にいればきっと安全だよ。」

「そうだ！ 恐れることはない！ 少しでも無理と感じればアイツは諦めるさ！」

ブターはそう言うと、ブタニを励ますように肩をたたき、それぞれ自分の家へと帰っていきました。

そして、3日後のお昼。

仔豚たちがいる方向へ進んで行く一つの影がありました。

「豚肉 焼豚 トンカツ 酢豚 豚バラ ローストビーフ
その奇妙な歌は、森中に響き渡りました。」

さて、この歌の正体とは・・・！？

ブタ3

その日は、朝からバタバタしていました。

「今日はアイツが来るかもしれない。長期戦になってもいいように、食料を集めておこう！」

「連絡が取り合えるように、鳥を確保しておかなくてわ！」

仔豚たちはあつちでブヒブヒ、こつちでブイブイと、大忙しです。

でも、そんなこんなで、なんとかお昼ぐらいには大体の準備が整いました。

すると、ブタ三^{さん}が、

「ん？何か聞こえない？」

と、言いました。

ブタ一^{いち}とブタ二^には、ジツと耳をすませました。

「豚肉 焼豚 トンカツ 酢豚 豚バラ ローストビーフ

と、遠くの方から奇妙な歌が聞こえてきました。

「『アイツが来たあ〜！！！！』」

仔豚たちは真つ青な顔をして慌てました。

「来た！来た！来た！？来たの！？えっ？誰が！？来たの？おばあちゃん？わあ〜迎えに行かなくちゃ」

「お、落ちて着けブタ三！来たのは、おばあちゃんなんかじゃない！しっかりしろ！！」

ブタ一は、急いでブタ三を現実に戻そうとしました。

その横でブタ二は、

「おばあちゃんだったらどれだけよかったか。……あつ……でも、おばあちゃんもう亡くなってるから、迎えに行くどころかつれてかれちゃうよ。」

と、遠い目をしてボソボソと呟いています。

「弟達よ！落ち着くんだ！僕達には避難すべき、すばらしい家々があるじゃないか！」

「ブタ二とブタ三は、その言葉に、ハツとしました。」

「そ、そっか。ボク達には家があるんだ。」

「じゃ、じゃあ早く家に入ろう！アイツが来てしまう！」

仔豚たちは、いそいそと家の中に入っていました。

その頃、仔豚たちの方向へ向かっている影は、肩あたりで結ばれた髪を揺らしながら楽しそうに歩いていました。

足には、この場所には相応しくない、透明でキラキラした硝子の靴。頭には、トレードマークの赤い頭巾ずきん。

もちろん、性別は女。名前を………赤美あかみ。

そう、あの赤美あかみちゃんです。

今日は、赤美あかみちゃんの誕生日なのです。

赤美あかみちゃんは、今夜のご馳走の為に豚を狩に来たのです。

赤美あかみちゃんの手には、豚を縛る為のロープがしっかりと握り締められています。

「フッフッフッ。さあ、今日は何匹捕まえようかしら。豚はやっぱり、丸焼きが一番美味しいから大きいのを1匹は捕まえないとね」
赤美あかみちゃんは、口の端を上げてニヤニヤしながら、ロープをバシバシ鳴らして仔豚たちのいる方へどんどん進んでいきました。

さて、仔豚たちの運命は……!?

ブタ4

赤美ちゃんが、奥へ奥へ進んで行くと、藁わらで作った小さな家らしき物が建っていました。

「なに？この家。つてか、家なの？これ。藁が山づみになってるだけみたいなの……。」

赤美ちゃんは眉をひそめながら、藁の家をジロジロ見ました。すると、中からブタ三さんの声が聞こえてきました。

「お、お前なんか食べられないぞ！ボクは、この中にいれば安全なんだ！お前なんかさっさと帰れ！」

赤美ちゃんは、その言葉を聞いた瞬間、ドス黒いオーラを出しましたが、次の瞬間にはにっこりと花のような笑顔を向け、

「そっか、そっか。」
と、行ってどこかに行ってしまいました。

ブタ三は、足音が遠ざかっていくのを聞いて、大喜びしました。

「やった〜！とうとう、あの赤美に勝ったぞ！ボクはとうとうやっただんだ！！」

ブタ三は、叫びながら家中を飛び跳ねました。

すると、どこからか黒い煙がモクモク出てきました。

「な、なんじゃこれ〜！！」

ブタ三は、とても驚きました。

外で赤美ちゃんが、ブタ三の藁の家に火をつけたのです。

「わざわざ家で料理しなくても、ここで丸焼きにして持って帰ればいいよね。」

赤美ちゃんは、火のついたマッチを次々と藁の家に放り投げました。そのときの、赤美ちゃんの顔は、まさに悪魔……いえ、大魔王のようでした。

しかも、口元がうっすらと笑っていて、さらに怖さが増していました。

それに答えるように、火はどんどん大きくなりました。
中にいたブタ三は、大慌てです。

「ゲホツゲホツ！ブホツ！このままじゃ酸欠になって死んじゃうよ」。
涙目になりながら、必死に逃げ道を探しました。

やっとの思いで、ブタ三が家から出てきたときには、藁の家は、ほとんど灰となっていました。

しかし、ブタ三はそれを悲しんでいるひまはありませんでした。外には、大魔王の微笑みのごとく、すさまじい顔とオーラを出している赤美ちゃんが立っていたのです。

「さあ、豚！他の豚共のところに案内してもらいましょうか」
赤美ちゃんは、ブタ三をロープで縛りながら言いました。

ブタ三は、その手際の良さとオーラで、従うしかありませんでした。ブタ三は何度も肯うなずきました。

赤美ちゃんは気分が良くなったのか、可愛らしく微笑むと、ブタ三をスルスル引きずって、ブタ三が示す方へ歩いていきました。

さて、1匹捕まってしまいましたが、他の兄弟はどうなってしまっ
のか・・・！？

ブタ5

「これは、ちよつと厄介ね。」

赤美ちゃんの前には、木の家が建っていました。

そう、ブタ二の家です。

「木は頑丈だし、マッチはもう使い果たしちゃったし……どうしようかしら。」

赤美ちゃんが うー、うー 唸っている足元には、ロープで縛られているブタ三がいました。

しかし、ブタ三の顔は、なにやら嬉しそうです。

(クッククック。ざまあーみる！ブタ二兄さんが作った家が、壊せるわけないだろ。お前の負けなんだよ。さつさとボクを解放してここから出て行け！)

ブタ三が、そんなことを思っていると、

「なに？その顔。これで勝ったつもり？いつとくけど、あんたを今すぐここで食べてもいいのよ？そうする？そうするか。そうしよう」

赤美ちゃんは、目をギラギラさせてロープでブタ三の首を絞めようとしてました。

ブタ三が必死で抵抗しようとしたときです。

「何してるんだ？」

赤美ちゃんが後ろを振り返ると、そこには赤美ちゃんの友達の『シンディ』と『白雪』がいました。

「シンディ。白雪。実は……。」

赤美ちゃんはこれまでの事を2人に話しました。

すると、白雪はニコニコしながら言いました。

「そんなの、その子を使えばいいじゃない。」

「えっ？どうするんだ？白雪。」

「あのね……。」

白雪は二人の耳元でコソコソと話し始めました。

ブタ三は、それを不思議そうに見ていましたが、話を聞いた赤美ちやんとシンディは、

「なるほど！」「」

と、言っておもむろにブタ三を見ました。

「えっ？えっ？」

ブタ三は オドオド オロオロ 。どうしたらいいのかわかりません。

「なぐに、大丈夫。何にも心配することはないわ。」

「そうだぞ。ただ、すこしお願いをきいてくれれば……。」

「というか、きかなかつたら、あなた今すぐ丸焼きにして食べちゃうから。」

ブタ三は、目に涙をいっぱい溜めて、震えながら、

「な、なんでも言ってくださいい。」

と、言いました。

3人はその言葉を聞くと、ブタ三に計画の内容を話しました。

ブタ三はそれを聞いて、目をいっぱいに開けると、3人の顔を見て戸惑うように言いました。

「そ、それは……あの……ちよつと……。」

すると、赤美ちゃんはブタ三の首のロープを絞めながら、

「じゃあ、食べられる？今すぐ、ここで。」

と、言いました。

プタ5（後書き）

赤美ちゃんのお友達紹介

『シンディ』・・・少し男勝りだが、しっかり者でまとめ役。

赤美ちゃん達が通っている学校の理事長の息子

（お金持ち）

と付き合っている。三人姉妹の末っ子。

『白雪』・・・とても可愛らしい容姿だが、腹黒の毒舌家。

自分専属のボディガードが7人もつくほどの大金

持ちの娘。

ブタ6

ブタニは椅子に座って、お茶を飲みながら兄弟達のことを考えていました。

「ブタ一兄さんとブタ三は大丈夫だろうか？」

すると、コンコンとドアを叩く音が聞こえました。

「だ、誰だ?!」

ブタニはこわばった顔で、ドアの向こう側にむけて言いました。

「ボ、ボクだよ、ブタ二兄さん。アイツに家を壊されて逃げてきたんだ!ここを開けて!」

「なに?!待つてる!すぐ開けてやるから。」

ブタニは急いでドアの鍵を開けました。

「大丈夫か?!」

そして、そのままドアを開けると、何か大きな物体がもの凄いスピードで家の中に入ってきました。

ブタニは、その正体を見て呆然としました。

「本当にあつさり入れたなあ。」

「だから簡単って言ったでしょう。」

「さすが白雪ね。」

「ご、ごめん、ブタ二兄さん。」

そこには、宿敵ともいえる人間3人組と捕らわれの身となっている弟がいたのです。

「お前ら、ブタ三を使つてっ・・・!」

ブタニは手を震わせながら言いました。

「なによお。すぐに食べないで、使つてやったんだから感謝しなさいよ!」

赤美ちゃんもプンプン怒りながら、手を腰に当てて言いました。

「まあまあ、こうして家に入ることができたんだし。」

「そうね。そんなことより、今日の前にいる獲物をどうするかよ

ね。」
そう言うと、3人はジリジリとブタ二に近づいて行きました。
ブタ二は恐怖で、目を離すことも動くこともできませんでした。
この後、森ではこの世のものとは思えないほどの叫び声が響いたそ
うです。

「さあて。これで2匹ゲットね 確か、あと1匹いたわよね？一番
上のヤツ。」

赤美ちゃんが手をパンパンさせながら、ブタ二に尋ねました。

「少しでも生き延びたいなら、さっさと案内する方がいいよ。」

白雪はニコニコとブタ二とブタ三の顔を覗き込みました。

「逃げようなんて思わないことだよ。」

シンディはしっかりとロープを持って言いました。

「わ、わかってるよ！こっちだ。こっちにブタ一兄さんの家がある。」

「

ブタ二は、赤美ちゃん達を誘導し始めました。

「ブタ二兄さん。こいつら連れて行っていいの？ブタ一兄さんも捕
まっちゃうかもしれないよ。」

「仕方ないだろう？結局、こいつ等だけでもいつかはここに辿り着
くだろう。だったら、僕たちの力でブタ一兄さんだけでも助かるよ
うに頑張ろう。」

「ブタ二兄さん……」

ブタ三は尊敬の眼差しでブタ二を見つめました。

さあ、とうとう仔豚の3兄弟と人間の3人娘の最終決戦の始まりで
す。

ブタ7

「ねえ、これって家としてどうなの？」

赤美ちゃんとシンディは、木の上の家を見たまま、言葉が出ません。数分後、やっと意識が戻ったシンディは言いました。

「お前達の兄は馬鹿なのか？それとも天然か？」

「う、うるさいな！ブタ一兄いちにいさんは頭がいいんだ！」

「確か、馬鹿と天才は紙一重とか言うよね。」

赤美ちゃんもなんとか言葉を発しました。

ブタ二にとブタ三さんはもう何も言えませんでした。

「で、今度はどう捕まえる？」

「そうだな。木の上に建っていて、しかも、今にも落ちそうだし・

」

「結構厄介ね。」

3人がうーうー唸うなっている横では、ブタ二とブタ三が会議中です。

「どうするの？ブタ一兄さんはまだボク達が来たことに気づいてないよね？」

「ああ、如何いかににかして、僕達が来たことを知らせて警戒してもらわないと・・・」

2匹がブーブー唸うなっていると、後ろの方から ガサガサ という音が聞こえました。

2匹は、不思議に思い後ろを振り返ると、そこには、木々の間から出てきているブタ一いちがいたのです。

「ブタ一兄さん?!?!」

「おや？ブタ二にブタ三じゃないか。どうした？遊びに来たのか？」

「何言ってるの?! アイツらが来たんだよ！」

「ってか、この状態で遊びに来るって、どんなだよ！」

そう、2匹はまだロープで縛られているままなのです。

「あははは。まあ、いいじゃないか。で、どうしたの？」

ブターは特に気にした風もなく言いました。
ブタ二とブタ三は脱力しながらも、なんとかこれまでの経緯を話し出しました。

「そ、それは大変じゃないか?! 早く家に入らないと! ロープを解ほどくからおいで!」

ブターが急いでロープを掴もうとしたとき・・・

「解かれると困るんだけどなあー。」
と、赤美ちゃんがロープの端をしっかりと持って黒い笑みを浮かべて言いました。

その横には、同じような表情をしたシンディと白雪こくゆびくもいました。

「丁度良かった。家には行けないから、どうしようかと悩んでいたところなのよ。」

ブターは、始めは怯おびえていましたが、赤美ちゃんという言葉でピーン! とひらめいたようです。

(そうだ! 家まで行けば・・・!)

ブタ二とブタ三も同じことを思ったのか、顔を見合わせて肯うなずき合いました。

そして、3匹は空を見上げて、

「っっあっ!! あれ何だ?!」
と叫びました。

赤美ちゃんとシンディと白雪の3人は、揃って空を見上げましたが、何もありません。

そこで、ハッ! として視線を戻すと、そこに仔豚の3匹の姿は

なく、周りを見渡すと3匹が木の上の家に向かっているのが見えま
した。

「こら！待て〜！晩ご飯！！」

赤美ちゃん達は、急いで仔豚たちを追いかけようと思いました。
そのときです。

ドガゴオオオ〜〜〜〜ン！！！！

と、とんでもない音がしました。

なんと、木の上にあった家が落ちてしまったのです。

家は無残にも、バラバラになっていました。

その傍^{かたわ}らには、固まってしまった3匹の仔豚。

その後ろには、ロープを持った女の子3人。

そして、森中に響く悲鳴。

この後、仔豚の3兄弟を森で見ることはありませんでした。

しかし、ある夜に、にぎやかで楽しい声の中に、

「ブヒブヒブウ〜〜〜」

という鳴き声が聞こえたとか、聞こえなかったとか……。

ブタ7（後書き）

終わりました！『赤美ちゃん・番外編 ブタの兄弟』！『赤美ちゃん』より長くなってしまいましたが如何だったでしょうか？
一応『赤美ちゃんシリーズ』は、これで終わりなのですが、また機会があったら書こうと思います（^^）

次回作は、普通に現代ものにする予定です！よかったらそちらの方もどうぞよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0217d/>

ブタの兄弟

2010年10月9日01時03分発行